明治廿二年十二月七日

# 曹洞宗大會議建議草案

全

# 建議草案を頒布するの理由

此の建議案を起草せんとする時の主旨たるや、當二十二年十一月より、全國末派寺院中より總代議員を公撰して、一宗の制度を議定せしめんと、管長閣下より公布せらるゝに及んで、島根縣第壹號支局下より、投票を以て總代議員に公撰せられたるに付、御請け致さる可しとの報、山田孝道の留學地に達するや、一身の上より顧みれは、未た若年にして經驗に乏しく、且つ本宗從來の制度に暗く、殊に學庠に在りて寸陰を惜んで、精勵苦學し以て、前途の目的を達せんとするの今日なれは、未た一宗の代議士となりて、制度を討議す可き重責に任へす然れとも翻て撰擧區中の各寺院か、不肖余の如き者を信認して一宗の大任を屬托せられたる、厚義を察すれは、撰擧區に盡さる可らさるの義務あり、加之、今日時勢の變化より、本宗の前途を杞憂して、平常多少の持論なきにあらす且つ現今の各宗議會の結果か、最も恐るべき、愧つべきもの多き時なれは、彼を思へ此を察せは、一身の利害のみを顧みて、躊躇すべき時にあらすと、遂に不肖を顧みす、此の大任を御請け致したるも、唯た議會に臨んで、一の持論もなく、意見を吐露すると能はすして、只管同意不同意の列に加はるのみに止まは、撰擧區に對して、責任を盡さるのみならす、一宗に對しては、不忠の至りなれは、寸陰是れ金なる學事を抛ちて、建議案を作ると能はすんは、自分の腹案のみても、作らさる可らすと決心して、此の業に從事せんとる時に當りて同宗に多年同床同學にして、親交ある梅個義なる者ありて、常に本宗前途の改良に熱心慷慨そる所あり、建議案を草せんとそる時に當りて、之を補佐して自己の意見を、採用せられたしとの事に付、兩人同盟して講學の餘暇を偷んで、二三ヶ月の間、刻苦憤勵して、起草せる内に、各地の總代議員兩三名より、自分等ハ僻地にのみありて、今日發達せる社會の形況を知らす近世の教育法、及ひ泰西宗教の組織、日本の今日以後、各宗の組織を如何にして、布教す可きかの事に付てハ、毛頭不案内にして、本宗理財の一條のみ意見あり、依て前數ヶ條には、貴兄等ハ宗内の學林卒業をして、今は世間の高等なる普通學研究の身分なれは、世と能く推移るの、卓見もあるならんと想像せり、依て出京までに、自分等の腹案となる可きものを、作り置き呉れとの依頼を受け、彼此に對して、如何なる困苦に出逢ふとも、是非共に起草せさる可らさる時となりしも、何分本宗從來の制度を充分取調ふ可き材料に乏しく、殊に本宗の理財の成蹟統計等ハ不案内なるを以て、唯た學理と經驗とにより、泰西の教會組織、本邦各宗今日の制度を材料として、彼此折衷し、自ら本宗漸次に改良の途につくへきものと、思考する所を構造せり、學制の如きハ、本邦今日の教育法と、他宗の學則とを酌量して、案出し布教法の如きは、外教及ひ各宗の組織に參照して組立、其外種々の調査を遂けて、完全の法方を設けんと、力の及ふ丈け盡せしも、何分時日の切迫せるに及んで、止ことなく、其の概畧を纏めて、大綱のみを記して、細目は其時に及んで、辨明せんとの目的にして脱稿したるハ、議會の前一兩日なるを以て、即時に二三部謄寫を命して、前きに依頼を受けたる、老宿方に呈して、其の責を塞がんとそるの際、俄に數多の議員諸師より、渉等も腹案の參考に致度、依て至急に印刷に附して、頒布せられよと、懇望せられたるのみならす、熱心なる、某外護者ありて、自ら振ふて印刷の任に當るへけれは、強て承諾せられよとの請求にて無止、兩人熟議の上、其の請に應したるも、不肖等ハ本宗に對して、熱心忠實の切なるの情より、起草したるものにして、彼此の黨派に關せす、獨立獨行公明正大にして。天を仰き地に俯して、愧ちさるの赤心を佛陀に誓て、事の玆に及ひたるものなれは、博愛賢明なる諸師にして、萬一にも之により、一層の名案を提出せらるゝか如きの好運に逢はゝ、不肖等血涙感謝の至りに堪へそ、伏して請ふ、不肖等の微忠を憐察せられんことを

No 22996/22
特50
471

# 建議草案目次

建議旨趣書
第一章　管長　六條
第二章　末派寺院及僧侶　四條
第三章　議會　九條
第四章　役員　二條
第五章　會計　二條
第六章　教會組織　二條二十項
總計十一章　八十四條　二十項
第七章　僧侶ノ階級ヲ設立スル
第八章　派出巡教　十一條
第九章　第一支校　七條　第二大學林　八條
第三改良事項　八條
第四大學院　九條　第五扶擁生　七條
第十章　歳入歳出ノ總計
第十一章　基本財産　九條

# 建議旨趣書

熟々我邦維新以還二十餘年ノ現象ヲ觀察スルニ封建制度一タヒ倒レテヨリ政府ハ只管本邦從來ノ制度ヲ改革シ泰西ノ政治、法律、文學、工藝、美術ヨリ一切ノ事物ヲ輸入シ直チニ泰西文明ノ域ニ達セントセリ是ニ於テカ日一日ヨリ進歩ヲ促シ今日ニ至リテハ三府五港都會ノ地ハ勿論寒村僻邑ニ至ル迄甚ダ著キ改進ノ跡ヲ呈シ之ヲ廿餘年前ノ日本ニ比スレハ殆ント一別邦ノ觀ヲナスニ至リタルハ實ニ我邦萬古ノ一大改革ト云ハサルヲ得サルナリ然リ而シテ顧ミテ我佛教社會ノ狀形ヲ觀察スルニ多少ノ改良幾分ノ進歩ヲナシタリト雖ヒ之ヲ社會一般長足ノ進歩ニ比スレハ殆ント年ヲ同フシテ論スヘカラサルモノアリ是レ一般社會ハ政府ノ保護奬勵ヲ受ケ而シテ我佛教社會ハ之ヲ受ケサリシニヨルト雖ヒ職トシテ佛教者カ熱心未タ足ラスシテ興學布教ノ濶疎ナルニ原因セサルヘカラス抑モ宗教ナルモノハ國民ノ智識ヲ發達シ道德ヲ養成シ間接ニ政治ヲ補翼シテ社會ノ安寧幸福ヲ增進スルモノナレハ從テ宗教者タルモノ常ニ社會ノ上流ニ位シ一般人民ノ先導者トナリテ之ヲ教化スルノ責任ヲ有スルハ論ヲ俟タサルナリ而シテ今日

ノ佛教者ハ概子其才德一般社會ノ中等以上ニ位スルモノニ比スレハ其ノ下ニ出ルモノ多シ故ヲ以テ社會ノ信用ヲ得テ充分ニ其責任ヲ盡ス能ハス只ソレ充分ニ其責任ヲ盡ス能ハサルヲ以テ益々其勢力ヲ喪失シ愈々其版圖ヲ減殺セラルヽニ至ル加之一方ニ於テハ外教闖入シ年々巨萬ノ資金ヲ抛テ處々ニ教會ヲ設立シテ貴顯紳士ヲ誘導シ學校ヲ築建シテ青年子弟ヲ教育シ百計千術心ヲ焦シ慮ヲ勞シテ布教ニ從事スルヲ以テ其ノ勢日ニ益々盛大ニ至レリ況ンヤ内地雜居ノ實行ヲ見ルニ至ラハ彼等外教者ハ一時驥足ヲ伸ハシ六十餘州彼等ノ行カント欲スル處ニ至リ隨意ニ教會ヲ設ケ學校ヲ立テ益々其ノ勢力ヲ張リ其ノ版圖ヲ擴メントスルハ固ヨリ疑ヲ容ルヘカラサル所ナリ左ナキダニ今日ノ青年ハ歐米ノ事物ニ薫染シ歐米ノ主義ニ心醉シ風俗習慣ハ勿論甚シキニ至リテハ人種ヲモ改良シテ碧眼紅毛トサントナスルノ企計ヲ有スルモノアルニアラスヤ假令一時保守的反動ノ勢力ニ壓倒セラレ「オルコット」氏ノ辯論ニ慫慂セラレ暫ク躊躇スルアルモ此ノ熱氣一タヒ冷消シ外教者カ一時ニ驥足ヲ伸シテ之ヲ煽動セハ彼等カ歐米崇拜ノ熱氣再タビ沸騰シテ到底防クヘカラサルニ至ラン果シテ此ノ時ニ至ラハ我佛教社會カ



非常ノ一大變動ヲ目擊スルハ逃ルヘカラサルナリ

故ニ佛教社會ニ於テモ某宗ノ如キハ夙トニ玆ニ觀ルアリテ疾ダヨリ大ニ力ヲ興學布教ニ盡シ一方ニ於テハ普通學ヲ設立シ或ハ援群ヲ撰出シテ世間高尚ノ學術ヲ研究セシメ或ハ海外ニ留學セシメ以テ人才ヲ養成シ他方ニ於テハ宗制法度ヲ改良シテ末派ノ共同心ヲ固結シ或ハ碩德老練ノ僧侶ヲ撰テ各地ヲ巡教セシメ以テ信徒ノ團結ヲ計リ或ハ海外ニ宣教師ヲ派遣セシメ以テ萬里ノ異邦ニ教域ヲ擴メント欲シ汲々トシテ蔗糖ノ油斷ヲ見ス彼等カ斯ル活潑ナル運動ヲナスニハ非常ナル熱心ニアラサレハ能ハス又タ非常ナル困難アルニ相違ナシ而シテ彼等カ斯ル非常ナル熱心ヲ以テ非常ナル困難ヲ冒シテ如斯ノ運動ヲナスニ汲々タルモノ何ソヤ如此セサレハ彼等カ責任ヲ盡ス能ハサレハナリ如此セサレハ他日一大變動ニ際シ彼等カ數萬ノ寺院、數十萬ノ僧侶、數百萬ノ信徒ヲ維持シ彼等カ積年ノ版圖ヲ維持スル能ハサレハナリ抑モ彼等ハ從來封建時代ヨリ王侯ノ保護ヲ受クルヿ我宗ヨリ薄ク寺有財產アルヿ我宗ヨリ少カリシヲ以ヲ日夜信徒ニ向テ法話ヲナシ談義ヲナシテ信徒ノ歸依ヲ促シ信徒ノ信施ニ賴リテ寺院ヲ維持シツヽ來

レルヲ以テ我宗ノ偏ニ王侯ノ保護ニ依リ寺有ノ財産ニ賴リテ生計シ終歳信徒ニ向テ教義ヲ談シ信徒ヲ誘導スルヿナク世俗塵烟ヲ避ケ只管打坐ノ王三昧ヲ修メ拂塵拂喝ヲ行シテ一箇半箇ノ雲水僧ヲ接得シツヽ來レルニ比スレハ其ノ信徒ノ信仰心ノ深淺ニ於ケルモ亦タ日ヲ同フシテ論スヘカラス然ラハ則チ彼等カ十歩ノ運動ヲナセハ我宗ハ百歩ノ運動ヲナスモ尚ホ彼等ニ及ハサルヲ恐ルナリ

然リ而シテ我宗ハ今日迄彼等ニ十倍セル運動ヲナセシカ否彼等ニ超越スルノ運動ハ暫タ措キ彼等ト同等ノ運動ヲモナス能ハサリシ彼等ハ敢テ彼等ノ運動ヲ恐ルニアラス彼等ノ運動ヲ羨ムニアラス又タ斷然打坐ノ王三昧ヲ抛却シ佛祖ノ正修行ヲ忘却シテ直チニ彼等ノ運動ニ摸擬セント欲スルニアラスト雖モ彼等ハ積年ノ教化力ニヨリテ我宗ノ信徒ノ信仰心ニ十倍セル信徒ヲ有セリ而シテ尚ホ彼等ハ必死ノ艱難ヲ冒シテ盡カスルヲ見レバ我宗カ彼等ニ及ハサルヿ十倍セル信徒ノ信仰心ヲ以テ將來ノ一大變動ヲ防禦シ之レニ打チ勝ツヿハ暫タ措キ我宗從來ノ位置ヲモ維持スル能ハサルヲ覺ユ故ニ今日ニシテ非常ノ勇猛ヲ憤起シ非常ノ熱心ヲ發輝シテ一大改良ヲ施シ以テ我宗將來ノ運動ヲ活潑ナラシメサルヘカラサルヲ信スルヲ以テ聊カ鄙見ヲ陳述シテ採擇ヲ仰カント欲スルナリ。

---

謹テ本宗々制ヲ按ズルニ國宗ノ公撰ヲ以テ管長ヲ推擧シ之ヲ一宗ノ主權者トシテ一宗統轄ヲ委任シ各地方ニ於テハ各地方寺院ヨリ教導取締及副取締ヲ撰任シ之レニ各地方寺院ヲ管掌セシメ而シテ管長ハ各地方寺院ヨリ末派總代議員ヲ召集シ議會ヲ開設シ一切ノ法度宗規ヲ議定シテ之ヲ實行スルノ制規ニシテ本末ノ和合ヲ圖リ一宗ノ隆盛ヲ計ルニ於テ最モ適當ナル組織ナルカ如シト雖モ精細ニ觀察スレバ完全無缺ト稱スル能ハザルモノアリ

抑モ宗制ナルモノハ一宗ノ大義、本末ノ權限責任、議會ノ權限、効力等總テ一宗ノ綱要ヲ制定シタル重大ノ憲典ニシテ一切ノ法度宗規ハ皆之レニヨリテ制定スルモノナレハ恰モ國家ノ憲法ノ如ク而メ法度宗規ハ憲法ニヨリテ制定スル所ノ一切ノ法律ノ如キモノナリ故ニ宗制ハ一旦之ヲ制定シタル時ハ輙ク改變スベカラズ而シテ法度宗規ニ至リ

テハ常ニ時勢風尚ノ進化ニ隨テ之ヲ改正セサルヘカラザルヲ以テ宗制ト法度トハ同一ノ範圍ニ排列スベカラザルナリ

然ルニ本宗現今ノ宗制ニ於テハ一宗ノ憲法トモ稱スベキス大綱モ一時ノ規程ト稱スベキ細目モ皆同一ノ位置ニ列シテ宗制トナセリ

故ニ本宗ニ於テハ一規則ヲ改メ一條例ヲ變ズル毎ニ始終宗制ノ變動ヲ見サルヘカラザルノ有様トハナレリ加之現今ノ宗制ニ於テハ兩本山ハ統轄ノ大權ヲ有スルニモ拘ラス其責任ヲ明示ス又議會ハ兩本山ノ意見ニヨリテ開設スルモノニシテ且ツ其權限効力等ヲ明示セザルモノヽ如シ是レ本宗々制ノ缺點ト云ハザル可カラズ

故ニ管長ハ宗内碩德ノ諮問ヲ經テ本末ノ權限、責任、議會ノ權限、効力等總テ一宗ノ綱要ニ關スル諸件ヲ制定シ永ク本宗ノ宗制トシ將來ノ法度宗規課金等ハ皆此ノ宗制ニ從ヒ議會ノ協議ニヨリテ決定シテ之ヲ實行スル事トセラレンヿヲ而シテ此改正ヲナスニ當リテ左ノ事項ヲ採用アランヿヲ期望ニ堪ヘザルナリ

## 第一章　管長

第一條　管長ハ一宗ノ元首ニシテ統轄ノ大權ヲ掌握シ宗制ニ依リ之ヲ行フ

第二條　管長ハ議會ノ協議ヲ以テ統轄ノ權ヲ行フ

第三條　管長ハ法度宗規ヲ認可シ之ヲ公布又ハ執行ス

第四條　管長ハ末派議會ヲ召集シ其開會、閉會、停會、解散ヲ命ス

第五條　管長ハ臨時ニ法令布達ヲ發シ又ハ執行ス

但シ此法令布達ハ次ノ議會ニ提出シテ若シ議會ニ於テ承諾セサレハ法度宗規トナスヲ得ス此場合ニ於テハ宗務局ハ將來ニ向テ其効力ヲ失ナフヿヲ公布スベシ

第六條　一宗ノ全体ニ關スル事件ハ管長其ノ責ニ任ス

凡ソ權利ヲ有スル者ハ其ノ責ニ任スルハ開明社會ノ通義ニシテ免ルベカラザルモノナリ然ルニ本宗管長ハ一宗統轄ノ大權ヲ有スト雖ヒ其ノ責任ニ至リテハ只宗制第一號兩本山盟約廿條ニ於テ「越山貫首ニシテ該規約ヲ犯ス時ハ能山貫首ヨリ退隱ヲ命ジ能山貫首ニ於テ之ヲ犯ストキハ越山貫首ヨリ之ヲ處置ス」トノ一條アルノミ而ソ此一條ハ特ニ兩本山ニ關スル兩貫首相互ノ規約ニ過ギズシテ末派ニ對スル責任ニアラ

ズ不幸ニシテ兩本山貫首共謀シテ宗制ヲ犯シ專斷ヲ行フガ如キ事アル時ハ其ノ責ヲ歸スヘカラス又宗制第貳號本末憲章第廿三條ニ於テ「此憲章ニ牴觸シタル命令ハ末派ハ之ヲ破棄スルノ權ヲ有ス」トノ一條アリト雖モ是レ亦末派ニ對スルノ責任ニ非ズ如何トナレハ只之ヲ破棄スルノミニシテ憲章ヲ犯シタル者其ノ責ヲ受ケザル時ハ一宗遂ニ無政府ニ至ルノミ故ニ一宗ノ安全ヲ圖ラント欲セハ主權者ノ權利責任ヲ確定セザルベカラズ是レ本章ヲ要スル所以ナリ

## 第二章　末派寺院及僧侶

第一條　末派寺院ハ管長ヲ公撰スルノ權ヲ有ス

第二條　末派寺院ハ廿五年以上ノ者ハ宗規ノ定ムル所ニヨリ末派議會議員タルノ資格ヲ有ス

但宗務局ノ役員又ハ教導取締、副取締等總テ行政部ニ在職スル者ハ任期中其資格ヲ有セス

第三條　末派寺院ハ宗規ノ定ムル所ニヨリ教導取締、副取締ノ撰擧及被撰擧權ヲ有ス

但當分ノ内廿五年以上ニシテ法地以上ニ住職ノモノハ格式ニ拘ハラス本條被選擧權ヲ有ス

第四條　末派僧侶ハ宗規ノ定ムル所ニヨリ請願建白ヲナスヲ得

從來ノ習慣トシテ議員ヲ撰擧スルニ取締若クハ副取締等總テ行政部ニ在ル役員ヲ以テセリ是レ行政官ガ立法官ヲ兼務スルガ如クニテ到底完全ナル議員ノ効用ヲナス能ハズ又現今ノ制規ニヨレハ教導取締、副取締ハ格式(法幢)ニヨリテ被選擧權ヲ與ヘリ而シテ格式ナルモノハ名望ノ點ニ於テハ効力アルヘシト雖モ實務ヲ執ルニ當テハ殆ンド効用ナキモノナリ故ニ實際ノ人材ヲ採用セント欲セハ此等ノ制限ヲ廢セサレハ適當ナル材器ヲ得ル能ハス是レ本章ヲ要スル所以ナリ

## 第三章　議會

第一條　末派議會ハ宗規ノ定ムル所ニ依リ公撰セラレタル議員ヲ以テ組織ス

第二條　議會ヲ分テ定期議會、臨時議會ノ二種トス定期議會ハ毎三年一回開設シ臨時議會ハ管長ノ意見若クハ議員三分ノ一以上ノ請求ニヨリテ之ヲ開設ス

第三條　議會ハ總テ宗門ノ法度、宗規及課金等ヲ議決ス

第四條　議會ニ於テ議決シタル事項ハ如何ナル事情アルモ次會ノ決議ヲ經ルニアラザレバ之ヲ改變スルヲ得ズ

第五條　議會ハ末派寺院及僧侶ノ建白ヲ受クルヲ得

第六條　議會ハ法度宗規又ハ其ノ他ノ事件ニ付建議スルヲ得

第七條　議會ハ基本財産及ヒ宗務局ノ會計ヲ調査スルヲ得

第八條　議會ハ宗務局ノ役員取締副取締、及本支校ノ教師、役員ノ過失ヲ彈劾シ管長ニ具狀シテ進退ヲ請フヲ得

第九條　議會ハ管長ニシテ宗制ニ違背シタル行爲又ハ一宗ノ体面ニ關スル過失ヲ犯ス時ハ協議ニヨリ内務省ノ裁制ヲ仰テ之ヲ進退スルヲ得

現今ノ宗制ニ據レバ議會ノ權限等ヲ明示セザルモノヽ如シ故ヲ以テ議會カ不都合ヲ感ズル「少ナカラズ且ツ社會平和ノ時ト雖モ五年毎ニ一回ノ議會ヲ開設ノ宗門擧揚ニ關スル事件ヲ議スルハ尙ホ頗ル進歩ノ遲キヲ覺ユ況ンヤ長足ノ進歩ヲ要スル多事ノ今日ニ於テヲヤ故ニ議會ノ權限ヲ定メ議會開設ノ期ヲ增スハ今日ノ急務ナリトス是レ本章ヲ要スル所以ナリ

## 第四章　役員

宗務局ニ於テ主任ノ役員ヲ置キ各事務ヲ整理セシムル「

第一條　宗務、學務、教務、理財ノ役員ハ管長ヲ輔弼シテ各主任ノ事務ヲ整理ス

但本條ノ役員ハ管長之ヲ特撰ス

第二條　各主任事務ニ於テハ各主任ノ役員其ノ責ニ任シ全体ニ關スル事務ニ於テハ各役員連帶シテ其ノ責ニ任ス

凡テ各主任ニ關スル公文書類ハ總テ各主任役員ノ署名ヲ要ス

一人ニシテ數課ノ事務ヲ兼ヌル時ハ事務自然ニ滯滯スル「ヲ免レズ而シテ其ノ權限行務ヲ制定セザル時ハ動モスレハ職權外ノ事務ニ干渉シ其ノ過失アル時ニ際シテ其責ニ任ズル者ナキニ至ル故ニ各課役員ノ行務權限責任ニ關スル章程ヲ制定シ之ニ從テ各其ノ事務ヲ整理セシムベシ是レ本章ヲ要スル所以ナリ

## 第五章　會計

第一條　末派寺院及信徒ニ賦課スル一宗ノ經費ハ總テ議會ノ協議ヲ經ルヲ要ス

第二條　宗務局ノ經費豫算及ビ歲出歲入ノ決算ハ理財課主任員之ヲ檢査確定シ宗務局ハ其檢査報告ト俱ニ之ヲ議會ニ提出スベシ

以上ノ諸項ハ既ニ宗制中ニ於テ明文アルモノ或ハ明文ナキモノアルベシト雖ドモ宗制ヲ改正スルニ當リテ最モ重要ナル事項ナレバ採用アランヿヲ冀望ニ堪ヘザルナリ

## 第六章　教會組織

第一條　從來ノ寺院組織ヲ廢シテ更ニ教會組織ヲ構成スルヿ

一　全國寺院信徒ノ總數及ヒ寺有ノ動不動產等總テ寺院ニ關スル收入ノ總額ヲ調査シ信徒ノ割合ニ準シテ教會ノ數ヲ定ムルヿ

二　一縣若クハ數縣、信徒ノ數ニ準シテ教區ヲ定メ教區ニ準ジテ教會ヲ設置スルヿ

三　教會ニ一等ヨリ十等以上十五等以下ノ等級ヲ定メ等級ニ準ジテ教會ノ財產ヲ賦配シ幷ニ信徒ヲ分屬シテ之ヲ管セシムベシ

四　教會ノ等級ト同一ナル僧侶ノ等級ヲ制定シ等級ニヨリテ僧侶ニ教會ヲ管セシムベシ但シ僧侶ノ勤惰ニヨリテ等級ヲ昇降シテ教會ヲ轉換シテ管セシムベシ

五　一縣若クハ數縣、教區ノ廣狹或ハ地勢ノ都鄙ニヨリテ大教會ヲ設立シテ各教會ヲ以テ之ニ屬セシムベシ

六　大教會長ハ各教會長ノ投票ヲ以テ之ヲ撰任シ所轄教區ノ教務及ビ配下ノ各教會ヲ監督セシムベシ

七　東京ニ於テ大教院（兩本山合同ノ別院ヲ設ケテ之ニ充ツ）ヲ置キ各大教會及ビ全國ノ各教會ヲ總轄シテ一宗ヲ整理ス

八　大教院長ハ各大教會長ヲ候補者トナシ全國各教會長ノ投票ヲ以テ之ヲ撰定スベシ

九　各教會ハ毎歲信徒ノ增減表ヲ製シ大教會ヲ經テ大教院ニ呈出スベシ

十　大教院ハ數年ニ一回全國各教會ノ信徒ノ增減ヲ調査シテ等級ヲ改正シ又ハ教會長ヲ昇降スベシ

宗教ノ隆盛ナランヿヲ欲セバ必ズ宗教者卽チ僧侶ヲシテ布教ニ熱心ナラシメサルベカラズ而シテ僧侶ノ熱心ヲ奬勵スルニハ僧侶才德ノ優劣ニ準シテ相當ノ位置ト名譽トヲ與ヘテ應分ニ其驥足ヲ伸ハシ其ノ才德ノ運用ヲナサシメザルベカラズ然ルニ現今ノ宗制ニヨレハ僧侶ノ才德ヲ以テ寺院ノ格式ニ比較セリ是レ完全ノ組織ト云フ可カラス如何トナレハ格式ナルモノハ所謂門閥ナリ門閥ナルモノハ虛名ニシテ實際ノ資格ニ非ズ而シテ僧侶ノ才德ハ虛名ニアラズシテ實際ノ資格ナリ實際ノ資格ヲ以テ虛名ノ格式ニ比スルノ理ナケレハナリ抑モ今日ノ寺院ハ概子從來ノ王侯大臣若クハ一大檀越ノ特別ノ皈依ニヨリ或ハ多數信徒ノ結合ニヨリテ創立シタルモノニ係レリ從テ創立ノ際ヨリ今日ニ至ル迄幾多ノ變遷ヲ經歷シタルヲ以テ寺有財產收入ヲ有シ勢力威權ヲ有シタルモ今日ニ至リテハ僅カニ堂宇ノ遺形ヲ存スルノミニシテ之ヲ保存スルサヘ能ハザルモノ少ナカラス之ニ反シテ從來ハ通常ノ一寺院タリシモノモ今日ニ至リテ財產收入ニ變動ヲ生セザルニヨリ依然トシテ確立シ却テ巨刹名藍ト稱スルモノニ勝ルモノ頗ル多シ而シテ才德優勝ニシテ巨刹名藍ニ住スルモノアルモ信徒少ク財產收入足ラザルヲ以テ



充分ニ才德ノ効用ヲ顯ス能ハズ或ハ富饒ノ寺院ニ住スルモ才德卑淺ニシテ財產ヲ利用シテ充分ニ布教ヲナス能ハサルモノ比々皆然リ況ンヤ血脉法緣ノ舊慣ニヨリ師資ノ情義ニヨリテ住職ヲ定ムルヲ以テ到底寺院ノ資格ト住職人ノ資格ト匹敵スル能ハズ斯ノ不平均ヨリシテ實際ノ布教ヲナス能ハザルノ結果ヲ生ズルナリ加之甚タシキ貧地ニ至リテハ一箇僧侶ノ生計スラ困難ナルモノアリ此等ノ寺院ハ畢竟有名無實ニシテ到底其ノ効用ナキモノナリ斯ル不都合ナル有樣ヲ此儘ニ打捨置カハ貪寺ハ益貪窮ニ陷リ富饒ノ寺院モ自然ニ貧窮ニ陷リ全國ノ寺院盡ク衰廢ニ歸スルヨリ外ナシ故ニ此ノ衰廢ヲ防禦シテ將來ニ向テ確乎不拔ノ堂礎ヲ立テント欲セバ從來ノ寺院組織ヲ廢シテ更ニ本條ノ教會組織ヲ設立シテ寺院ト住職人トノ平衡ヲ計ラザルベカラズ

然リト雖モ本條十項ハ教會組織ノ大綱ニシテ其ノ細目ノ如キハ此ニ枚擧ス可カラズ而シテ此教會組織ハ泰西諸國ニ行ナハルヽ所ノ教會組織ヲ折衷シテ搆成シタルモノナレバ將來ニ向テ本宗ノ如キ組織ノ宗門ニハ最モ適當セリト雖モ固ヨリ一大改革ナルヲ以テ縱令政府ノ權力ヲ以テスルモ容易ニ之ヲ實行スル能ハズ況ンヤ政府ノ干涉ヲ脫却シ

テ各自自由ノ權利ヲ重ンスルノ今日ニ於テ斷然積年ノ舊慣ヲ一掃シテ新組織ヲ設立セントスルガ如キハ到底一朝夕ニ之ヲ成シ遂ゲルヲ望ム能ハザルナリ然レ𪜈此等ノ大改革ヲナスニハ預シメ其目的ヲ定メ然ル後其方向ニ向テ針路ヲ取ラザヘカラス故ニ本條ヲ以テ目的トナシ年ヲ逐フテ次第ニ改革ヲ施シ遂ニ此目的ヲ達センヿヲ期セザルベカズ而シテ此ノ目的ヲ達セントスルニハ左ノ方法ヲ採用スルニ若クハナシ

第二條　現在全國寺院ノ動不動產及ヒ年中一切ノ收入ヲ調査シテ一等ヨリ卅等迄ノ等級ヲ制定シ又タ是ニ準シタル僧侶ノ等級ヲ制定シ此ノ等級ニヨリテ僧侶ヲ合格ノ寺院ニ住職セシム（僧侶等級ハ次章ニ詳記ス）

一　寺院ノ等級ハ從來ノ小本寺、末寺、及ヒ三法幢地、法地、平僧地、巷室等ノ格式ニ拘ハラズ單ニ寺院ノ歲入ヲ標準トシテ之ヲ定ム

但シ從來ノ本寺、末寺、及ヒ三法幢地等ノ格式ハ教會組織實行迄ハ寺院ノ等級ニ關セス之ヲ保存ス

二　寺院ノ動不動產ニシテ既ニ宗務局ヘ書上ノ分ハ該書上ニヨリテ之ヲ調査ス

三　檀家及ヒ信徒ヨリ得ル處ノ寺院ノ歲入ハ一方ニ於テハ各地方取締ヲ經テ各郡町村ノ寺院組合ノ幹事ヲシテ調査セシメ而シテ之ヲ各支局下總幹事ノ討議ニ付シ然ル後ニ取締ヲ經テ宗務局ニ上奏セシメ他方ニ於テハ各地方ヘ巡教師ヲ派出セシメ（巡教師ノ章規ハ次章ニ詳記ス）實際之ヲ調査セシメテ宗務局ヘ上奏セシム

四　檀家若クハ信徒ヨリ寺院ヘ寄附シタル寺有ノ動不動產ニシテ住職人ノ私有トナリ居ル分ハ巡教派師ノ際取締又ハ組合幹事立合ニテ住職人及ヒ檀家總代人該財產寄附人等ヲ說諭シテ寺有ニ復セシメテ宗務局ニ上奏セシム

五　宗務局ハ前三項ノ調査ニ據リテ寺有ノ動不動產ヲ平均シ或ハ檀家信徒ヨリシテ得ル所ノ歲入ハ各地ノ比例ヲ以テ平均シテ等級ヲ定ム

但シ信施ノ歲入ノ比例ハ例セバ甲郡寺院ノ百戶ハ乙部ノ五十戶ニ相當シ丙市ノ五十戶ハ丁市ノ百戶ニ相當スルノ類ヲ云フ

六　各寺ヨリ毎歲一回檀家信徒ノ增減表ヲ製シ取締ヲ經テ宗務局ニ上奏セシム

七　宗務局ハ五年ニ一回前項ノ調査表ニ據リテ寺院ノ等級ヲ改正ス

八　現在ノ住職者ニシテ若シ甲等ヨリ乙等ノ寺院ニ移轉セントスルモノハ改正試驗課程（改正試驗課程ハ宗務局ニ於テ別ニ之ヲ定ムベシ）ニヨリ試驗ノ上之ヲ許可スベシ

但シ三等ヨリ二等ニ移轉セントスルカ如キ場合ヲ云四等ヨリ五等ニ移轉スルカ如キハ此ノ限ニアラス

九　本條ニ關スル規則ノ大要ヲ印刷シ各寺ニ配賦シテ常ニ檀家信徒等ニ熟覽セシメ住職交代ノ際ニ當リ師資法類ノ緣故ニ拘束シ寺院ノ資格ニ不適當ナル材器ヲ住職セシメント主張スルカ如キ患ナカラン事ヲ圖ルベ

以上十項ハ前條教會組織ヲ設立スルノ豫備ノ大綱ナルヲ以テ一年以上二年以內ノ歲月ヲ費セハ充分ニ實行スヘシ而シテ此ノ實行ヲ見ルニ至ラハ今日ノ青年僧侶ハ各自才德相當ノ位置、名望ヲ得ント欲シテ必ス一層ノ精神ヲ勵シ益々才德ヲ研磨シ以テ布敎傳道ニ熱心シ一方ニ於テハ自然ニ寺院ハ住職人ト不適合ヨリシテ生スル所ノ寺院衰廢ノ患ヲ防キ遂ニ確乎不拔ノ基礎ヲ設立スルニ至ルハ疑フベカラサル事實ナリ故ニ本條ハ前條ヲ實行スル前ニ當リテ缺クヘカラサル最上ノ第一着ナリトス

## 第七章　僧侶ノ階級ヲ設立スル事

僧侶ニ一等ヨリ十五等ノ階級ヲ設立スル事

次項ヨリ假リニ二十五等トシテ論ス

第一條　各階級ニ位階稱號ヲ授與スヘシ

但シ上座、長老、和尙、大和尙等ノ稱號ハ從來ノ慣例ニヨリテ位階ノ外ニ之ヲ保存ス

第二條　支校三年級ヲ卒業シタル者ハ任首座職ヲ許ス

但シ改正學科ヲ云フ次項皆同シ（改正學科ハ次章ニ詳記ス）

第三條　支校全科ヲ卒業シタル者ハ在學中ノ成績ニヨリテ十五等ヨリ十一等迄ノ位階ヲ授與シ三十等ヨリ二十等迄ノ寺院ニ住スルノ資格ヲ得セシム

第四條　大學林全科卒業ノ者ハ在學中ノ成績ニヨリ十等ヨリ七等迄ノ位階ヲ授與シ二十一等以上十等以下ノ寺院ニ住スルノ資格ヲ得セシム

第五條　大學院（次章ニ詳記ス）卒業者ハ大學林卒業後官私立ノ學校ニ於テ大學院修

學年限ト同年間修學ノ證書ヲ有スル者或ハ大學林卒業後巡教師ヲ勤務シ著明ノ功績ヲ奏シタル者等大學林卒業ノ上特別ノ學識ヲ有シ特別ノ功績アル者ハ六等ヨリ一等迄ノ位階ヲ授ケ九等以上一等迄ノ寺院ニ住スルノ資格ヲ得セシム

第六條　三等以上ノ位階ヲ有スル者ハ管長ノ候補者タルノ資格ヲ有ス

第七條　管長ハ階級ノ上ニ獨立スル者トス

第八條　現在住職者ノ階級ハ現在住職寺院ノ等級ニヨリテ之ヲ定ム

但シ大學林卒業ノ者若クハ他ノ諸學校ノ卒業證書ヲ有スル者ハ本章第五條ニ照準シテ之ヲ定ム

第九條　現在住職者ノ爲メニ最簡易ナル試驗課程ヲ制定シテ位階ノ昇進ヲ望ム者ヲ試驗ス

第十條　位階ハ條例ノ定ムル所ニヨリテ昇降與奪スヘシ

僧侶ノ等級ノ定メ位階ヲ與ヘテ優劣高下ヲ分別スルハ本宗ノ平等無差別ノ主義ニ反スルカ如クナレ𪜈所謂平等無差別ハ差別ノ當体即チ無差別ニシテ玉石亂混ノ謂ニアラス社會カ單純ナル時代ニアリテハ漠然タル舊慣ニヨリ遺傳ノ古格ヲ墨守スルモ敢テ差閊ナカルヘシト雖𪜈今日ノ如キ社會カ複雜ノ時代ニ至リテハ徒ラニ舊慣ニヨリテ上座大和尚等ノ名稱ノミヲ以テ人才ヲ品別スルノミニテハ到底人才ヲ發達セシ布教ニ熱心ナラシムヘカラス元來今日ノ名稱ハ宗内法式上ニ於テ設立シタル列祖ノ遺法ニシテ決シテ廢スヘカラサルモノナレハ宜シク宗内ノ法式上ニ於テ之ヲ保存スヘシト雖モ之ヲ以テ人才ノ品等ヲ表章スヘキモノニアラサレハ更ニ學識、才力、功勳、德行ニヨリテ階級ヲ設立スヘシ然レ𪜈現在ノ住職者ハ概子從來ノ教育ヲ受ケタル人ナレハ才識等ヲ以テ精密ナル品等ヲ付スル能ハサレハ暫ク現在寺院ノ等級ニヨリテ階級ヲ定ムルヨリ外ナシ之レニ反シテ後進ノ青年ハ教育ニヨリテ如何樣ニモナルヘケレハ今日ニ於テ之ヲ確定シテ將來ニ實行セハ必ス觀ルヘキノ結果ヲ得ヘシ且ツ夫レ外面ヨリ刺激ヲ與ヘサレハ自然ニ怠惰放逸ニ流ルハ人類ノ弱點ニシテ到底免ルヽ能ハサルモノナレハ之ヲ防禦シテ人ヲシテ益々憤勵セシムルニハ優勝劣敗ナル天然ノ社會原則ニ法ルノ外ナシ而シテ現今僧侶ノ才、識、德、功ニヨリテ位階ヲ與ヘ品等ヲ立ツ

ルハ卽チ此ノ社會ノ原則ニ從フモノニシテ大ニ自然ノ發達ヲ助クルヲ以テ今日ノ如キ佛教者カ非常ノ憤勵ヲ要スル時代ニ於テハ最モ必用ナリ尤モ現今ノ宗制中ニハ僧侶ノ學ト寺院ノ格式トヲ比較シテ住職ノ資格ヲ制定シタレ𪜈既ニ格式ニ關セズ財產收入ニヨリテ等級ヲ立ツル以上ハ住職者モ亦タ之ニ準シタル品等ヲ設立シ位階ヲ與ヘテ之ヲ分別セサルヘカラス是レ本章ヲ要スル所以ナリ

## 第八章　巡教師ヲ派出セシムル事

全國未派寺院檀家ノ數ニヨリテ巡教區ヲ制定シ巡教師ヲ撰任シテ各教區ニ巡回セシメ各教區ヲ教化シ併セテ各地方寺院及ヒ信徒ノ況狀ヲ視察セシム

第一條　巡教師ハ大學林卒業ノ者若クハ之レト同等ノ學力ヲ有スル者ヲ募集シ一定ノ科程ヲ設ケテ該科程ニヨリ試驗ノ上及第者ノ中ヨリ最高點ノ者ヲ抜撰ス

但シ試驗科都合ニヨリテ臨時ニ改正スヘシ

第二條　宗務局ハ巡教師ニ關スル章程ヲ制定シテ巡教師ヲシテ之レニヨリテ職務ヲ行ハシム

第三條　巡教師ヲ分テ一等二等ノ二類トナシ當分ノ內一等十人、二等二十人トナス

但シ逐年都合ニヨリ增加スヘシ

第四條　巡教師ハ一年毎ニ一回上京シテ宗務局ニ復命スルモノトス

第五條　一等巡教師ノ月給ハ二十圓二等ハ十五圓內外トス

第六條　巡教師ノ往復費併ニ巡教中ノ費用ハ各教區ニ於テ之ヲ負擔ス

但シ往復旅費ハ一里　錢トス

第七條　巡教師ノ任職年限ハ三年トス

第八條　毎三年ニ一回巡教師ノ功績ヲ調査シテ階級ヲ昇進セシム

第九條　毎三年ニ一回前期ノ巡教師ヲ解任シ更ニ試驗科程ヲ改正シテ該試驗科程ニヨリテ試驗ヲ執行シテ新タニ巡教師ヲ撰任スヘシ

但シ前期ノ巡教師ハ此ノ試驗ヲ受クルヲ得

第十條　巡教師ニノ巡教上特別ノ功績アル者ハ試驗ヲ要セスシテ再勤ヲ許スヿアルヘシ

第十一條　巡教師ニシテ巡教師章程ニ違背シ若クハ職權ヲ濫用シテ地方寺院及ヒ信徒ヲ壓制スルノ所爲アル時ハ各地寺院組合幹事連署ヲ以テ取締若クハ惣代議員ヲ經テ宗務局ニ具狀スベシ

宗制中派出巡教規則ノ整然タルヲ見レハ巡教師ヲ派出シ各地方ヲ巡教セシムルノ必用ハ夙ニ宗務局ニ於テモ認識セラレタルヿヲ知ルヘシ而シテ今日ニ至ル迄其ノ實行ヲ見ル能ハスシテ此ノ規則ヲシテ徒ラニ空文ニ屬セシメタルハ勿論諸種ノ事情アリタルヘシト雖モ巡教ニ關スル費原ト巡教ニ關スル方法其宜ヲ得サリシニ原因セサルヘカラス而シテ既往ハ暫ク措キ完全ナル教會組織ヲ施行シテ將來ニ向テ本宗ノ基礎ヲ鞏固ナラシメ宗門ノ擧揚ヲメ益々盛大ナラシメサルヘカラサルノ今日ニ至リテハ愈々其ノ必用ヲ感セサルヲ得ス然リ而シテ巡教ニ關スル規則ハ如何ニ美麗ナルモ巡教師ヲ撰拔スルノ方法其宜ヲ得テ其ノ費用ヲ支出スヘキ財源ヲ確定セサルヘカラス而シ其ノ方法ハ既ニ陳述セルヲ以テ更ニ其ノ費金ヲ徵集スルノ策ヲ講セントス

巡教師三十名ノ年俸六千圓トス而シテ三千圓ハ課金中ヨリ之ヲ支出シ他ノ三千圓ハ左ノ方法ニヨリテ之ヲ徵集ス

明治十四年四月ノ調査ニヨレハ金國末派寺院ノ總數ハ一万三千六百五十三ケ寺ナリトス而メ明治廿一年護法會ノ調査ニ係ル一萬二千二百廿一ケ寺ノ檀家ノ總數ハ九十七萬九千九百廿八戸ナリ故ニ殘リ千四百三十ケ寺ノ檀家ヲ合スレハ少クナクトモ百萬戸ニ下ラス而シテ統計ノ示ス所ニヨレハ年中毎十戸ニ對シテ一人ノ死亡者アル割合ナレハ百萬戸ニ對スルハ死亡者ハ年中拾萬人ニ下ラス故ニ此等ノ檀家ニ對シ死亡者アル毎ニ一人ニ付一錢以上十錢以下ノ教費ヲ出金セシムル時ハ平均一人三錢トスルモ三千圓ヲ得ヘシ之レヲ以テ巡教費ノ半額ヲ補フヘキナリ

以上ハ固ヨリ一時ノ術策ニシテ到底之ヲ以テ滿足スヘキニアラスト雖モ之ヲ實行スル間ニ教化ノ遍播ニ從フテ自ラ財源ヲ深廣ニシテ益々布教ノ規模ヲ擴張スルヲ得ヘキナリ

# 第八章　支校及大學林　改良事項　大學院及拔擢生

## 第一支校

第一條　各地方ノ支校ノ數ヲ末派寺數ノ割合ニ準シ一千ケ寺以上ノ處ニ一校ヲ設立ス

第二條　學年々限ヲ五ケ年トス

但一年ヲ以テ一學期トナシ別ニ學級ヲ設ケス

第三條　從來ノ宗部、內典、外典ノ程度ヲ低フシ分量ヲ減シ普通學ハ尋常師範學校ノ學科ヲ折衷シテ之ヲ制定ス

第四條　學科ヲ分チテ正科、別科ノ二類トナシ正科ハ總學科ヲ修ムルモノトシ別科ハ宗部、內典、外典幷ニ歷史、心理、教育、哲學類ノミヲ邦語ニヨリテ修ムルモノトス

第五條　正科ハ十三歲以上ニシテ高等小學校卒業ノ者若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニアラサレハ入ルヲ許サス別科ハ晩年ニシテ正科ヲ修ムル能ハサル者ノ爲メニ設クルヲ以テ廿年以上ノ者ニアラサレハ入ルヲ許サス

第六條　宗部、內典、外典ノ三科ノ如キハ可成簡易ニメ了解シ易ク實用ニ有効ナルモノヲ撰ンテ教科トナシ特ニ一二年生ノ宗部、內典ハ和文ノ教科書ヲ用ユヘシ其ノ學科モ務メテ平易ニシテ實用ニ適當ナル課書ヲ撰用スヘシ

第七條　正科卒業ノ者ト別科卒業ノ者ト位階等級ヲ異ニシ正科卒業ノ者ヲ優待スヘシ

## 第二大學林

第一條　從來ノ宗部、內典、外典ノ程度ヲ低フシ分量ヲ減シ普通學科ハ概子高等師範學校ノ學科ニ準シ可成宗教ニ必用多キ部分ヲ多量ニシ少キ部分ヲ減シ折衷シテ之ヲ制定スヘシ

第二條　學年々限五ケ年トス

但一年ヲ以テ一學期トナシ別ニ學級ヲ設ケス

第三條　學科ヲ分チテ正科、別科ノ二類トナス正科ハ諸學科ヲ修メ別科ハ宗部、內典、外典及心理、歷史、教育、哲學、泰西宗教ノ類ノミヲ邦語ニヨリテ修ムルモノトス

第四條　正科ハ廿五年未滿ニシテ支校正科卒業ノ者若クハ之レト同等ノ學力ヲ有スル者ニアラサレハ入ルヲ許サス別科ハ晩年ニシテ正科ヲ修ムル能ハサル者ノ爲メニ設

クルモノナレハ廿五年以上ニシテ支校別科卒業若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニ限リ之ヲ許ス

第五條　從來ノ春秋二期ノ生徒募集法ヲ廢シテ一年一回トナシ從來ノ生徒撰出法ヲ廢シ預メ毎年入學生ノ定員ヲ定メ置キ支局ノ撰出ニヨリ之レヲ拔擢スヘシ

但常詰百三十名位トナスヘシ

第六條　從來ノ月資ヲ廢シ學期試驗ニ於テ成績優事ノ者及ヒ品行方正篤志校群ノ者ニ學資金若クハ物品ヲ賞與スヘシ

第七條　正科卒業ノ者ハ別科卒業ノ者ト學位等級ヲ異ニシ正科卒業者ヲ優待スヘシ

第八條　正科卒業者ハ大學院ニ入ルヲ得

第三　大學林及支校改良ノ事項

第一條　試驗ヲ分チテ學期試驗、通常試驗ノ二類トナス學期試驗ハ毎年期末ニ一回之ヲ執行シ通常試驗ハ毎月一回目末ニ之ヲ執行ス而シテ毎日ノ授業上ニ於テ點數ヲ取リ之ヲ通常試驗ノ點數ニ加算シ通常試驗ノ點數ヲ學期試驗ノ點數ニ加算シ對照平均シテ之ヲ定ム

第二條　各學科ノ外ニ品行科ヲ置キ品行科ノ點數ヲ各學科總點數ノ三分ノ一トス

例セハ一科ノ滿點ヲ百點トシテ十科千點ヲ以テ滿點トスレハ品行點ハ一科五百點ヲ滿點トシ總點數千五百ヲ以テ滿點トス

第三條　各學科ハ一科四割以上品行點ハ六割以上平均六割以上ノ點數ヲ及第トス

第四條　朝夕ノ諷經勤行ハ授業前後三十分宛トス

第五條　諷經勤行ヲ欠席スルモノハ品行點ヲ減殺ス

第六條　要用ニ依リ他泊セント欲スルモノハ宿主若クハ生徒ノ宿泊ヲ要求スル者ヨリ依頼證ヲ役員ニ呈出セシメテ之ヲ許可スベシ

第七條　教師及學務學監ト事務員ノ行務ヲ區別シ互ニ兼務セシメサルヘシ

第八條　飲食ヲ改良シ衛生ニ注意セシムヘシ

以上八條ハ支校大學林兩所ニ必用ナル事項ヲ記シタルモノナレハ兩所ニ於テ實行スヘシ

從來本宗ノ支校幷ニ大學林ノ學則ヲ按スルニ主トシテ學者識者ヲ養成スルノ目的ナルガ如シ宗門ニ於テハ固ヨリ學者識者モ必用ナルニ相違ナシト雖モ學者識者ナルモノハ直接ニ通常ノ布教上ニ於テ其ノ必用ヲ感スル丁少シ殊ニ布教傳道ヲ專一トシ信徒ノ信仰心ヲ堅固ナラシメ將來ニ向テ益々本宗ノ版圖ヲ擴張セサルヘカラサルノ今日ニ當リテハ學者識者ヨリハ寧ロ本宗ノ大旨ヲ了シ佛教ノ大義ニ通シ傍ラ世間普通ノ學ニ渉リ普通學ノ智識ニヨリテ宗乘教理ヲ應用シ信徒ヲシテ容易ニ宗乘教理ヲ了解セシメ之レニヨリテ安心立命ノ地ヲ得セシムルニ適當ナル所謂布教實用的ノ人材ノ必要ヲ感セサルヲ得ス然ルニ本宗ノ學科ハ一方ニ於テハ宗部、內典、外典ノ如キハ科目頗ル高尙ニシテ學年ノ割合ニシテハ科書ノ數モ多キニ過ギ之ニ反シテ英數ノ二科ノ如キハ前三科ニ比スレハ程度甚タ低クシテ總學科ノ程度全ク其ノ平衡ヲ失スルノミナラス一科中ニ於テモ科書ノ前後順逆ノ不平衡アリ(特ニ外典ノ如キハ甚シ)此ノ不平衡ヨリシテ生徒ハ前三科ニ向テ非常ニ腦髓ヲ惱マサヽルヲ得サルヲ以テ他ノ二科ニ向テ其ノ程度ノ低キニモ拘ハラス適當ノ力ヲ用ユル能ハサルニ至ル是レ總學科平衡ノ進歩ヲナス能ハサル

一大原因ナリ

斯ル科程ハ曾テ秩序的ノ教育ヲ受ケタル子弟ヲシテ之ヲ修メシムルモ猶ホ此ノ憂アルヲ免カレス況ンヤ本宗ノ僧侶ハ概子秩序的ノ教育ヲ受ケサルヲ以テ一層甚シキ困難ヲ見ル是レ本宗ノ僧侶ガ此等ノ科程ニ於テ特ニ才力進歩ノ功ヲ奏セサルノ原因ナリ

從來ノ教育法ハ單ニ注入教育(教師科書ヲ購シテ生徒ヲシテ未讀ノ書ヲ輪講セシメ或ハ問題ヲ與ヘテ之ヲ解釋答辨セシムル等)ヲ以テシ更ニ發育教育(生徒之ヲ聽聞スル等)ヲ施サヽルモノヽ如シ而シテ其ノ注入教育モ徒ニ書籍ニ依リテ古人ノ諸說ヲ陳述スルノミニシテ更ニ一種確定ノ說ヲ指示シ事實ニ徵シテ之ヲ解明シテ生徒ヲシテ分明ニ其ノ說ヲ了解セシムルコトナシ是レ完全ノ發達ヲ得ル能ハサルノ原因ナリ

全体從來ノ學科ニヨレハ充分ニ五科ノ卒業ヲナスモ猶ホ普通學ノ智識ナキヲ以テ折角學得シタル宗乘教理ヲ實地ニ應用スル能ハズ況ンヤ前條ノ弊アルニヨリテ前三科モ充分ニ研究スル能ハス又他ノ二科モ充分ノ修學ヲナス能ハス所謂一モ取ラス二モ取ラス曖昧模糊ノ中ニ年華ヲ經過シ了ルヲ以テ卒業ノ後ニ至リテハ英數二科ノ如キハ全ク遺

恰シ了リテ僅カニ二三科ノ書籍ヲ「カキイレ」ニヨリテ之ヲ講スルニ過キサルノミ是レ本宗僧侶カ卒業ノ後ニ至リテ充分ニ布教傳道ノ任ニ勝ユル能ハサルノ原因ナリ

抑モ普通學ノ僧侶ニ必用ナル所以ハ曾ニ卒業ノ後布科傳道ノ際ニ當リテ宗乘教理ヲ應用スル上ニ於テ必用ナルノミニ非スシテ僧侶ガ宗乘教理ヲ修ムル上ニ於テ最モ必用ナリトス如何トナレハ普通學ナルモノハ普通理想（マンモンセンス）ヲ養生スルノ材料ニシテ諸種ノ專門學ヲ修ムル基礎ナレハナリ故ニ宗乘教理ヲ修ムルト同時ニ普通學ヲ修ムルトハ普通學ノ智識ニヨリテ宗乘教理ヲ發明スル「頗ル多キヲ以テ學者ノ爲メニ便益ヲ與フルコト少ナカラサルナリ普通學ヲ兼修スル時ハ既ニ宗乘教理ヲ修ムル時ニ於テ此等ノ利益ヲ得又タ卒業ノ後ニ至リテ布教傳道ノ上ニ於テ應用ノ便益ヲ得所謂一舉兩得ナルモノニシテ欠ク可カラサルモノナリ故ニ布教傳道ニ適當ナル人材ヲ養成セント欲セハ左ノ方法ニヨリテ學科ヲ改正シ教育法ヲ改良セサルヘカラス

第一　總學科ノ程度ヲ平衡ナラシムル「

第二　秩序的ノ教育ヲナス「

第三　宗部內外典ノ程度ヲ低フシ分量ヲ減シテ普通學ノ大意ヲ兼修セシムル「

第四　注入、發育教育ノ兩方ヲ併用シテ平衡ヲ失ハザルシムル「

第五　宗部內典ノ如キハ最モ高尚ナル理法ニシテ教授ノ際最モ茫漠荒誕ニ流レ易キヲ以テ可成書籍ニ拘泥セスシテ務メテ確實簡明ナル抽象的ノ說ヲ事實ニ徵シテ說明シ生徒ヲシテ之ヲ了解シ之ヲ應用スルニ便ナラシムル「

以上ハ本宗學科組織ノ改正幷ニ教育方法ニ付テ其大要ヲ指示シタルノミ而シテ此ノ改正ヲナサント欲セハ到底從來ノ費額ヲ以テスル能ハサレハ少クトモ從來ニ倍增セル費額ヲ以テセザルヘカラス依リテ今其ノ大綱ヲ左ニ招ケテ閲覽ニ供ス

大學林學科及時間表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 宗部 | 六時 | 歷史 宗教 萬國 | 一時 |
| 內典 | 四時 | 神學。哲學。 | 二時 |
| 外典 | 三時 | 理化。博物學。 | 二時 |

| | | |
|---|---|---|
| 數學 | 二時 | 心理。教育。論理。 |
| 英學 | 五時 | 作文。演說。 |
| | | 三時 |
| | | 二時 |

本表ハ一日五時間一週間六日(日曜ヲ除ク)三十時間ノ授業ノ見積ナリ

以上ノ學科ヲ五級ニ分テ授業スル時ハ一日ニ二十五時ノ授業時間ヲ要ス而シテ教師一人ニ付貳時間宛ノ授業ヲナストスレハ十三名ノ教師ヲ要ス教師一名ノ月給ヲ廿五圓ト見積レハ一ケ月ノ月給三百二十五圓ニシテ一年ノ月給三千九百圓ナリ但シ十二名ノ外ニ事務學監二名ヲ要ス

大學林生徒ヲ常詰百三十名トシテ一人ノ食料ヲ一ケ月二圓ト見積リ一年ノ食料三千百二十圓ナリ

學監寮ノ營膳、臨時費、寮監ノ營膳、臨時費、及諸賞典、書籍科、區役所費、別途費(別途費ハ明治廿年及廿一年ノ平均)ヲ明治十九年ヨリ廿二年迄二年間ノ總額ヲ平均スレハ一ケ年千〇廿八圓九十一錢〇六毛ナリ

大學林年中經費豫算表

| 人員 | 費額 |
|---|---|
| 教師 十二名 | 三千九百圓月給 |
| 生徒 百卅名 | 三千百廿圓食料 |
| 學監 二名 | 六百圓月給 |
| 雜費 | 一千〇廿八圓九十一錢〇六毛 |
| 小計八千六百五十三圓九十一〇錢六毛 | |
| 此外ニ門番小使受附ノ月給食料等ヲ要スルヲ以テ | |
| 總計九千圓 | |

大學林ニ於テ此ノ改正ヲ實行セント欲セハ支校モ之ニ準シテ改正セサルヘカラス如何トナレハ大學林ニ入學スル生徒ハ支校ヨリ出ツル所ノ生徒ナレハナリ然ルニ從來

各地ノ支校ハ一國若クハ一縣下ニ於テ一二百ケ寺ノ聯合ニテ一校ヲ組織スルヲ以テ相當ノ費金ヲ募集シテ實際ニ學科ヲ行フ能ハサリシ況ンヤ改正學科ヲ行ナハント欲セハ到底從來ノ聯合ニ於テ之ヲ負擔スル能ハサレハ是非トモ從來ノ二校若クハ三校ヲ合併シテ一校ヲ組織セサルヘカラス

而シテ支校ノ組織ニ於テ最モ注意ヲ要スルハ學科ノ程度是レナリ從來ノ學則ニヨレハ大學林ト支校ノ學年ノ割合ニハ宗部、內典、外典ノ三科ノ程度殆ント平衡ヲ失セリ故ニ此等ハ尤モ簡明平易ニシテ且ツ他日大學林ニ入ルノ豫備トナルヘキモノヲ擇テ教科書トナスヘシ特ニ宗部、內典ノ如キハ可成和文ノ教科書(若シ適當ノ書ナシトセハ有識能文ノ者ニ命シテ編纂セシメテナリ厓)書ヲ用ヒサルベカラス

要スルニ從來ノ學則ハ學者、識者ヲ養成スルノ目的ニ在ルカ如クニシテ其ノ目的ヲ達スル能ハス縱ヒ其ノ目的ヲ達スルモ普通學ノ智識ナキヲ以テ實地ニ應用スル能ハス況ンヤ其ノ目的トスル所ノ實際ノ學者、識者ヲ養成スル能ハサルニ於テヤ故ニ支校大學林ハ宗乘教理ノ大義ト普通學ノ大意トヲ兼修セシメテ宗門普通ノ布教者傳道者ヲ養成スルノ處トシテ學者、識者卽チ宗門ノ師範トナルベキ人材ヲ養成スルニ到底他ニ方法ヲ求メサルベカラザルナリ

第四　大學院ノ設立(大學院ノ名稱ハ暫ク假設スルノミ)

大學院ハ宗乘及ビ普通佛教ノ蘊奧ヲ研究シ宗門ノ棟梁講學ノ師範トナルヘキ人材ヲ養成スルヲ以テ目的トス

第一條　大學院ハ宗乘及ヒ倶舍、唯識、華嚴天台等ノ諸種ヲ學科トス

第二條　大學院ハ學年ヲ三年トス

第三條　大學院ノ生徒ハ廿五年以下ニシテ大學正科卒業生中ヨリ毎年大凡十名ヲ拔擢シテ入學セシム

第四條　大學院ノ費金ハ總テ宗費ヲ以テ之ヲ支辨ス

但シ生徒ノ衣服小使ハ各自辨タルベシ

第五條　大學院ノ試驗法及ヒ其ノ他ノ規則ハ總テ大學林ニ準ス

第六條　大學院ハ當分ノ內說教講習所ヲ以テ之ニ充ツ

第七條　大學院ノ生徒ハ卒業ノ後(一定年限中)大學林若クハ宗務局ノ役員タルノ義務ヲ有ス

第八條　大學院ノ生徒ハ時トシテハ大學林ノ教授ヲ補助スルノ義務ヲ有ス

第九條　大學院年中ノ費金ハ大凡千九百圓内外トス

大學院費金表

| | 教師三名 | 幹事一名 | 校僕一名 | 校員賄料 | 雜費 | 臨時費 | 一年總額 | 平均殘額 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一ヶ月 | 一名廿圓宛 | 十圓 | 五圓 | 一人二圓宛 | 十圓 | | | |
| 初年 | 七百二十圓 | 百廿圓 | 六十圓 | 初年十五人三百六十圓 | 百廿圓 | 四十圓 | 千四百圓 | 四百八十圓 |
| 次年 | | | | 二年二十五人六百圓 | | | 千六百六十圓 | 二百四十圓 |
| 三年 | | | | 三年三十五人八百四十圓 | | | 千九百圓 | 二口〆七百廿圓 |
| 平均一年 | 千九百圓 | | | | | | | |

此ノ外ニ三年間書籍料一名ニ付三百五十圓總計三千圓ヲ要ス

ノ然レトモ此書籍ハ一時ニ購求スレバ永久ニ用ユルヲ得ヘシ而シテ臨時增減修繕スルニ過キサレハ此等ノ增減修繕費トハ臨時費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ此書籍費ハ本表最下欄ニアル處ノ初年ヨリ二年迄ノ平均殘額七百二十圓ト拔擢生ノ費金平均殘額三千六百圓ヲ以テ購求スレバ猶ホ千三百圓ノ殘額アリ之ヲ以テ大學院及ヒ拔擢生ノ豫備費トナスヘシ

大學林ヲ卒業シタル者ハ宗内ノ普通布教者タルニ過キスメ未タ以テ宗乘及ヒ佛教ノ奥ヲ究タル者トナスヘカラサレバ内、大學林ノ宗部、内典ノ教師トナリ外、宗門ノ棟梁タルヘキ人材ヲ養成セサルヘカラズ而シテ今日宗門ノ碩學ト稱スル所ノ諸師及ヒ現今大學林等ノ教授ニ從事セラルヽ所ノ諸師ト雖モ永久ノ生活ハナシ能ハサレハ是非トモ此等諸師ノ後任タルベキ人材ノ豫備ヲナシ置カサルベカラス然ルニ此等ノ後任ヲ大學林卒業生中ヨリ得ル能ハストスレハ必ス之ヲ他ニ求メサルベカラス而シテ此等ノ人村ハ普通一般布教者ニ非スシテ宗門中最モ高等ナル學務ヲ掌ル者ナレハ大學林生ノ如ク多數ヲ要セザルヲ以テ大學林卒業生中ヨリ適當ナル人材ヲ選拔ノ宗

費ヲ以テ宗乗及ヒ佛教ノ蘊奥ヲ研究セシメ以テ他日ノ用ニ應ゼシムベシ

是レ大學院ノ設立ヲ要スル所以ナリ

第五　抜擢生(抜擢生ノ稱號ハ暫ク假立スルノミ)

抜擢生ハ世間各種ノ學科ヲ修メシメ内、以テ宗ノ教師トナリ外、以テ布教傳道ノ任ニ堪ユヘキ人材ヲ養成スルヲ目的トス

第一條　廿五年以下ニシテ大學林正科卒業生中優等點ヲ得且ツ後來望アル者ヲ擇テ抜擢生トス

第二條　抜擢生ハ一定ノ學校ヲ定メス各專門學校ニ入學スルヲ得

第三條　抜擢生ノ修學年限ハ大凡五ケ年トス

第四條　抜擢生ハ毎年大凡三名宛之ニ任ス

第五條　抜擢生ノ學資ハ總テ宗費ヲ以テ支辨ス

第六條　抜擢生ノ學資ハ一人ニ付一ケ月十圓トス

第七條　抜擢生ハ滿期ノ後(一定年限中)大學林ノ教師及ヒ巡教師宗務局ノ役員トナル義務ヲ有ス

抜擢生費金表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 初年 | 三人 | 一人ニ付一ケ月十圓 | 三百六十圓 |
| 二年 | 六人 | | 七百廿圓 |
| 三年 | 九人 | | 千〇八十圓 |
| 四年 | 十一人 | | 千四百四十圓 |
| 五年 | 十五人 | | 千八百圓 |
| 平均一年千八百圓 | | | 四口〆三千六百圓 |

平均ニ至ル迄四年間ノ殘額

普通ノ布教者ハ大學林ニ於テ之ヲ養成シ大學林ノ宗部内典ノ教師タル者ハ大學院ニ於テ之ヲ養成スト雖モ大學林ノ普通學ノ教師トナリ或ハ世間青年ヲ誘導シ若クハ宗務局ノ顧問ニ應答スヘキ東西兩洋各種ノ學術ニ通スル人材ノ必用ヲ感セサルヲ得ス而シテ今日ニ於テハ本宗僧侶中ヨリ此等ノ人ヲ得ル能ハサルヲ以テ世間ニ俗漢ヨリ

雇入シテ之ヲ用ユルモ僧侶ニシテ此等ノ學術ニ通シタル者ナキ時ハ此等雇入教師ノ授業ノ動惰精粗ヲ監スル能ハサルヲ以テ此等ノ學科ガ自然ニ疎漏ニ流ルヽハ免ル能ハス幸ニシテ此等ノ弊風ナシトスルモ猶モ今日ノ時世ニ當リテ僧侶ガ此等ノ學術ニ通セサレハ布教傳道上ニ於テ不便ヲ感スルヿ頗ル多シ是レ抜擢生ヲ要スル所以ナリ

## 第十章　歳入歳出ノ總計

納高總額

三萬二千圓

内譯　壹萬七千圓　末派課金一萬七千〇九十一圓拾六錢八厘ノ所九十一圓以下ヲ除テ算ス

壹萬五千圓　護法會元金三十萬圓トシテ一ヶ年五分ノ利

出高總額

三萬圓

内譯　壹萬圓　兩本山幷ニ宗務局費

九千圓　大學林費

三千圓　巡教費

千九百圓　大學院費

千八百圓　抜擢生費

二千圓　高等普通學校費

千圓　四務主任ノ役員中二名ハ從前ノ監院之ヲ勤メ他ノ二名ハ之ヲ新任ス即新任二名ノ衣資料及教務ニ關スル諸費

差引二千五百圓殘過

以上

此ノ二千五百圓ハ當局者ノ説ニヨレハ末派課金一萬七千餘圓ノ所年ニ未納者アリテ實際周年ノ總額ハ一萬五千圓内外ナリト云ヘリ故ニ右二千五百圓ハ且ク豫算外ニ置キ年々素金トナリタル分丈ハ方法ニヨリテ之ヲ貯蓄シテ臨時ノ費ニ供スヘシ（細末支出金額不明了ニ付殘金ヲ以テ償ハルヽモノトス）

護法會設立ノ際ニ當リテ宗務局ノ布達ニヨレハ護法會滿會ノ時即チ明治廿三年ヨリ末派ノ課金ヲ全廢シテ護法會ノ利息ヲ以テ本宗ノ經費ヲ支辨スルノ預約ナリシ然レ𪜈近

來年頻ノ不景氣ノ爲メ本年ニ至ル迄未タ當時ノ豫望ノ如ク全額ヲ募集スル能ハスシテ僅カニ三十萬圓ニ過キス而シテ三十萬圓ノ利金ハ年中五分トスレハ壹萬五千圓ニ過キサルナリ然ルニ末派寺院中ニ於テモ一萬五千圓ハ末派課金一萬七千圓ニ比スレハ僅カニ二千圓ノ不足ナレハ此ノ利金ヲ以テ本宗ノ經費ヲ支フルニ足ル事ナレハ護法會完納者ハ明年ヨリ斷然課金ヲ免シ未納者ハ追々納金スレハ本宗ノ費用ハ充分ナルヘシハ主張スル者頗ル多シ是レ一應尤ナル說ナリヽ雖ヒ精細ニ思考スレハ實際ニ於テ不充分ナルヿヲ發見スヘシ尤モ本宗興學布敎ヲ從來ノ儘捨置キ更ニ改良進步ヲ計ルニ及ハストスレハ一万五六千圓ヲ以テ充分ナリト雖ヒ如何セン今日ノ有樣ニテ滿足スヘカラス否充分ナル改良ヲ計ラサレハ將來ニ向テ今日ノ位置ヲモ維持スル能ハサルナリ故ニ苟モ本宗ノ隆盛ヲ得ント欲セハ興學布敎ノ進步ヲ計ラサルヘカラス而シテ興學布敎ヲ盛大ニセント欲セハ從來ノ經費ヲ以テ之レニ從事スル能ハサレハ少クトモ從來ニ倍增セル全額卽チ一ケ年三萬圓ヲ消費セサルヘカラス然ルニ末派寺院中或專ラル部分ハ地方ノ不景氣ト寺院ノ疲弊トヲ口實トシテ課金全廢ノ豫約ヲ實行センヿヲ主張スル者アリ尤モ地方ノ不景氣ト寺院ノ疲弊ハ逐年甚キニ陷リ益々困難ニ赴クハ掩フ可ラサル事實ニシテ決シテ無根ノ口實ニアラス然レトモ寺院ノ困難ナルコトハ獨リ本宗ノ寺院ニ限リタル事ニアラス各宗ト雖ヒ皆然リ否本宗ノ寺院ヨリ一層ノ困難ニ陷リタルモノ少カラス而シテ此等他宗ノ寺院ノ課金ハ遙カニ本宗ノ課金ヨリ一層ノ過重ヲ負擔シナカラ敢テ課金ノ減少ヲ主張セサルヲ見レハ本宗寺院ノ困難ハ困難ニ相違ナシト雖ヒ實際從來ノ課金ヲ負擔シ能ハサル程ノ困難ニアラサルヲ知ルヘシ故ニ今各宗中殆ント本宗ト同等ノ位置ニ在ル處ノ一二宗寺院ノ課金ト本宗寺院ノ課金トヲ對照シタル統計表ヲ揭ケテ閲覽ニ供ス

| 宗名 | 寺數 | 等級 | 課金總額 | 一寺平均 |
|---|---|---|---|---|
| 日蓮宗 | 三千五百五十四 | 十七等、別ニ等外一 | 一萬千〇五十圓〇〇三錢 | 三圓廿五錢二厘余 |
| 淨土宗 | 七千〇八十七 | 三十等 | 一萬四千百七十四圓 | 二圓 |
| 曹洞宗 | 一萬三千六百五十二 | | 一萬七千〇九十一圓十六錢八厘 | 一圓廿五錢三厘余 |

此ノ表ニヨリテ見レハ本宗ノ課金ハ遙カニ日淨二宗ノ下ニ在リ而シテ日淨二宗ノ寺院ハ本宗ノ寺院ヨリ特別ニ豐饒ナル譯ニアラストスレハ本宗ノ課金ハ決シテ負擔ニ堪ヘサル程ノ過重ト云フヘカラス人增セハ水增ノ諺ハ只一家ノ事ニ付テ云ヒタルニアラサレハ一家ノ集合体ナル一國ノ上ニ於テモ適用スヘシトスレハ一宗ノ團体ニ適用スヘキ言ナルガ本宗ノ寺數ハ日淨二宗ノ寺ノ上ニ在リ而シテ其ノ課金ハ之レニ及ハサルハ即チ本宗ノ興學布教カ二宗ニ及ハサルノ證ナリ啻ニ理論上ニ於テ然ルノミニアラス實際二宗ノ宗制學則ニ就テ之ヲ觀ルモ本宗ニ勝ル數等ナリ而ソ此ノ優劣ヲ生スル所以ハ他ナシ只課金ノ多寡ニヨルノミ故ニ護法會五十萬圓ニ滿タル時ハ課金ヲ減シテ五六千圓トナスモ可ナルヘシト雖モソレ迄ハ矢張年々一萬七千圓宛ヲ出金シテ本宗ノ興學布教ヲ隆盛ニセサルヘカラサルナリ

僧堂及護法會金取立方等ノ如キハ現今宗務局ノ處置方ト稍齊シキヲ以テ煩雜ニ渉ルヲ恐レテ之ヲ省畧ス

## 第十一章　本宗ノ基本財産ヲ興スヘキ事

第一條　本宗ノ基本財産ハ總テ一宗共有金ノ性質ヲ有スルモノヲ以テ組立ルモノトス

一　護法會金ハ一宗共有ノ性質ヲ有スルヲ以テ基本財産ニ編入スルモノトス

二　宗務局ニ於テ毎年前年經費ノ決算ヲナシテ餘殘アル時ハ之ヲ基本財産ニ編スルモノトス

三　全國末派寺院僧侶及信徒ヨリ兩本山ヘ奉納スル所ノ金額ハ之ヲ基本財産ニ編入スルモノトス

寺格昇進、轉衣、色衣免許等ノ報恩金及信徒ノ寄附金、全國末派寺院賽錢箱ノ納金等ヲ云フ

第二條　基本財産ヨリ生スル所ノ利金ハ興學布教等一宗ノ經費ニ充テ其ノ不足ヲ全國寺院ニ賦課シテ之ヲ徵集ス

但毎年基本財産ノ利子ニ變動アルヲ以テ毎議會ニ豫算ヲ改正シ其ノ期限ノ經費ハ必ス剩餘アルノ豫算ヲ立ツヘシ

第三條　基本財産ハ一宗ノ公金ナレハ其ノ所有權ハ一宗ノ共有ニ屬スルヲ以テ兩本山

管長ト一宗ノ公權ヲ代表スル議員中ヨリ位置財產ヲ所有スル四人以上ノ總代ヲ撰出シテ法律上ノ責任アル方法ニ依リ其ノ保管ヲ委托ス

第四條　基本財產ハ一宗ノ命脉ニ關スル貴重ナル公金ナルヲ以テ如何ナル場合ニモ元金ヲ消費スルヲ許サス

但不得止場合ニ於テハ議會ニヨリ之ヲ決ス

第五條　基本財產ノ元金ハ最モ確實ナル銀行ニ預ケ又ハ最モ變動少キ確實ナル株券若クハ公債證書ヲ買入レテ利息ノ增殖ヲ圖ルモノトス

第六條　基本財產ハ宗務局ノ理財主任之ヲ取扱フモノトス

第七條　基本財產中ニ毎年增加スル所ノ金額及ヒ之レヨリ生スル利息ノ增減等總テ精細ノ決算ハ宗務局經費ノ精算表ト同時ニ公布スルモノトス

第八條　基本財產ノ增減及取扱ノ明細書ヲ理財主任ヨリ毎議會ニ提出シテ調査ヲ受クルモノトス

第九條　基本財產ニ關スル事件ハ總テ管長、總代、理財主任、聯帶シテ其ノ責ニ任スルモノトス

一ノ社會アレハ必ス基本財產アルハ文明社會ノ定則ニシテ今ヤ我政府モ中央集權ノ制度ヲ變シテ地方自治ノ制度ヲ置カルニ至リ如何ナル僻地ノ一小村落ト雖ドモ一團体ヲナスモノハ皆其ノ基本財產ヲ組立ルニ至レリ故ニ本宗ノ如キ一萬餘寺ノ一大團体ニ於テハ最モ其必用ヲ感セスンハアラス況ンヤ本宗ニ於テハ護法會金及末派寺院僧侶信徒ヨリ時々本山ニ奉納スル所ノ報恩金等基本財產ニ編入スヘキ性質ヲ有スル金額アルニ於テヲヤ本宗ノ制度モ漸次ニ改良シテ純然タル教會組織ヲナシ地方自治ノ制度ヲ實行スルノ時ニ當テ基本財產ナキ時ハ興學布教ヲ隆盛ニシ教會ヲ擴張シテ益々宗風ヲ擧揚スル能ハス是レ基本財產ヲ設クルノ必用アル所以ナリ

明治二十二年十一月五日印刷
明治二十二年十一月七日御屆出版

著述兼發行人　島根縣士族　山田孝道
東京市芝區三田豊丁目拾四番地稲葉政人方寄留

印刷者　山口竹二郎
東京々橋區西紺屋町七番地

特50
471

曹洞宗大会議
建議草案

国立国会図書館

019692-000-3

特50-471

曹洞宗大会議建議草案

山田　孝道／著

M22. 11

ABG-0486